

論文の和文要旨	
論文題目	日本語の動詞「いく」「くる」の多義の記述 —本動詞から補助動詞へ—
氏名	中山 健一 (なかやま けんいち)

本研究の目的は、現代日本語(東京方言)における「いく」と「くる」の多義の記述をすることである。方法論として、言語資料(コーパス)を使い実例(約 7700 例)を収集・分析することによる、実証的な記述を行なう。

従来の研究では「本動詞」と「補助動詞」に 2 分されているが、その意味的・構文的性質から、「本動詞」「本動詞と補助動詞との中間的なタイプ」「補助動詞」の 3 つに分けられることを主張する。そのうえで、3 者それぞれの意味記述を行なう。

#### <本動詞>

まず、ガ格で表わされる移動主体の空間的な移動を表わす「中心義」について考察した。中心義では、「人」が移動主体となる実例が圧倒的に多くこの場合が最も典型的である。

場所格との共起頻度の点で「いく」の方がより経路格(場所ヲ)・方向格(場所ノ方ニ/ニ向カッテ)をとりやすく到着点があいまいになることがあるのに対し、「くる」ではほとんどない。この性質の違いは、「いく」と「くる」での派生義の発達のさせ方の違いにも関わる。

次に、「派生義」について考察した。実例分析による結論として、以下の表のような派生義が立てられる。

各派生義は、中心義の空間移動の「経路」がどう捉えられているかによって、大きく、以下の 3 つに分けられる。

- (i) 「出発点→経過点→到着点」の「経路」が、他の概念へと置き換えられる
- (ii) 「経路」のうち、出発点、経過点、到着点の一部が完全に捨象される
- (iii) そもそも「経路」としては捉えられない

ガ格： 人名詞	1-1 組織への加入 【人ガ 組織ニ／へ いく・くる】 例：息子が大学に行く・新入社員が会社にくる	(i)
	1-2 人の進路選択・活動の段階 【人ガ 抽象(分野・段階などを表す)ニ いく／くる】【人ガ ~の道を いく】 例：中級から上級へいく・数学が得意だから理数系にきた	(i)
	1-3 死亡【人ガ 逝く】 例：ぼっくり逝ってしまう・（「くる」なし）	(i)
	1-4 人からの働きかけ(1)【人ガ 手段・方法デ くる】 例：（「いく」なし）・相手が変則的な手できた	(i)
	1-5 方法の選択 【(人ガ) 手段・方法デ いく*】【(人ガ) 方法を表す副詞 いく*】 *いきます／いこう／いくべき など、意志や当為を表す形式 例：その方法でいこう・（「くる」なし）	(ii)
ガ格： 現象名詞	2 現象の発生【現象ガ (場所ニ) くる】 例：（「いく」なし）・東京に大地震がくる	(iii)
ガ格： 抽象名詞	3-1 人からの働きかけ(2)【人からの働きかけガ 人カラ (人ニ) くる・(いく)】 例：先生に連絡がいく・客からクレームがくる	(i)
	3-2 文化圏、分野間の混淆【抽象ガ 言語・文化圏・分野カラ くる】 例：（「いく」なし）・スペイン語からきた外来語	(i)
	3-3 時間への派生【特定の時間ガ くる・(いく)】【状態ガ くる】 例：ゆく春／ゆく年・締め切り日がくる 混雑のピークがくる	(ii)
	3-4 物事の程度における基準への到達 【抽象ガ 抽象マデ／トマデ* / 数ニ いく】【抽象ガ 抽象(ニ)マデ くる】 *「トマデ」の場合「いく」は否定となる 例：売り上げが100万にいかなかった・我慢が限界にくる	(ii)
	3-5 活動・行為などの進捗【活動・行為ガ 副詞 いく】 例：準備が予定通りいく・（「くる」なし）	(ii)
	3-6 因果関係としての事態の発生 【抽象(状態を表すものが多い)ガ 抽象カラ くる】 例：（「いく」なし）・蒸し暑い気候からくる虚脱状態	(iii)
	3-7 虚構上の出現としての位置関係 【位置ニ 抽象ガ くる】 例：（「いく」なし）・ラベルが前にくるように並べる	(iii)
	3-8 心理的、生理的状態の発生 【身体部位ニ 状態ガ くる】（【副詞(オノマトペ)ト くる】） 例：（「いく」なし）・手にしびれがくる	(iii)
その他	4-1 [ガ格名詞の制限がゆるやか] 変化【~ガ ~方向ニ いく】【~ガ ~トコロニ いく】 例：状況がダメな方向にいく・（「くる」なし）	(ii)
	4-2 [ガ格名詞が現れない] 観点・話題【抽象カラ いくと、…】【~ト きたら、…】 例：うちの子ときたら全然勉強しない・順番からいくと、私の方が先だ	(iii)

派生義のうち(iii)は、空間移動からのなぞらえでは説明できない。特に(iii)のタイプの「くる」は、「話題・観点」を除き、「発生・出現」を表わすと言える。それ以外にも、「3-3」のうちガ格名詞が状態を表す場合も「発生・出現」の側面をもつ。「いく」は「観点・話題」以外に、空間移動へのなぞらえでは説明できない派生義はない。しかし、「いく」のみで「くる」にはない派生義のうち、「活動・行為などの進捗」と「変化」は、なんらかの「事態の推移」という側面をもつ。「いく」と「くる」との、多義構造における本質的な違いは、「いく」は「事態の推移」、「くる」は「事態の発生・出現」を表わすことである。

### ＜本動詞と補助動詞との中間的なタイプ＞

具体的には、「品物を置いていく」「ドレスを着てくる」などで、「いく」「くる」の表わす意味は、本動詞「いく」「くる」の中心義と同一であり、意味派生を起こしていない。かつ、前項動詞「Vして」と「いく」「くる」は、別々の動作・状態を指し示している。しかし、前項動詞と「いく」「くる」との結びつきが強く、このことは、連体節構造など、文法事実にも反映される。

### ＜補助動詞＞

まず、補助動詞を、意味的に大きく以下の5つにわけて論じる。

- ①空間移動を表わす場合(「いく」「くる」両方)
- ②時間への派生(「いく」「くる」両方)
- ③「くる」の表わす「事態の発生・出現」
- ④「いく」の表わす「事態の推移」
- ⑤人から人への働きかけの移動(「くる」のみ)

#### ①空間移動を表わす場合(「いく」「くる」両方)

まず、主動詞が移動動詞であり、「Vしていく」「Vしてくる」が空間移動を表わす場合について考察する(例：出かけていく／帰ってくる／走っていく など)。空間移動は、本動詞「いく」「くる」の中心義であるが、しかし、補助動詞「いく」「くる」が担うのは、主動詞で表わされる空間移動に対し、次の抽象的、文法的意味を付与することである。それが「補助動詞」たるゆえんである。

a : 移動の方向性(「その移動が、必ず一方向のものであること」)の付与

b : 移動における、話し手との直示(deixis)的な関係の付与

とくに、「b」について、本動詞の場合は「いく」と「くる」の対立であるのに対し、補助動詞は、「Vしていく」「Vしてくる」「Vする」であり、対立のしかたが異なる。さらに、主動詞によっては、補助動詞「いく」「くる」どちらかにしかつかないもの、実例数に大きな偏りがあるものがある(○「去っていく」／×「去ってくる」など)。

#### ②時間への派生(「いく」「くる」両方)

大きく、「時間的推移」(例：時間が過ぎていく／締め切りが近づいてくる など)と「非テンス的な時間的基準点の付与」(例：君は十分やっつけていけるよ／20年間この町で生きてきたなど)の2つがある。

#### ③「くる」の表わす「事態の発生・出現」

補助動詞「くる」がもち、補助動詞「いく」のもたない意味として、「事態の発生・出現」と括ることができるものがある。大きく、ガ格名詞で表わされる物事の出現と、ガ格名詞の物事における状態の発生の2つがある。

まず、ガ格名詞で表わされる物事の出現は、主動詞が「出る」「うかぶ」などの出現動詞、および、「聞こえる」「見える」などの知覚動詞の場合である。この場合の補助動詞「くる」の担う意味は、「出現の強調」である。

次に、ガ格名詞の物事における状態の発生について、大きく「進展性」を表わすものと表わさないものに分けられる。「進展性」を表わすものは、補助動詞「いく」とともに、従来「変化の過程」などと呼ばれていたものであり(だんだん暖かくなってくる など)、補助動詞「いく」と「くる」とが共通の枠組みで説明されてきた。しかし、人の心理的・生理的变化や状態を表わす動詞が主動詞となり(怖くなってくる／ねむくなってくる／イライラ

してくる／つかれてくる)、人における一時的な状態の発生を表わす点で、補助動詞「いく」とは大きく異なる。

また、「進展性」を表わさず、もっぱら「状態の発生の強調」を表わす場合がある。具体的には、「こうなってくると」の形の場合、あるいは、ある条件・原因のもとでの帰結としての状態の発生を表わす場合(結果次第で、責任の重さがかわってくる／量によって利益が違ってくる など)である。これは、補助動詞「いく」にはみられない特徴である。

#### ④ 「いく」の表わす「事態の推移」

「事態の推移」の場合の、補助動詞「いく」の意味には、変化の「進展性」と、「多回的動作による数量の累加」の2つがある。前者の典型は、従来「変化の過程」などと呼ばれていたタイプ(だんだん暖かくなっていく など)であるが、補助動詞「くる」との違いとして、主体動作客体変化動詞で、かつ、出来事を描写するような文の場合、客体に起こる変化の「進展性」を表わす(濁水を清水に変えていく／丁寧に作品を作り上げていく など)。

「多回的動作による数量の累加」は、多回的動作によって、動作を受けた動作対象、あるいは、動作を行なった動作主体の数量が、漸次的、累加的に増加することを表わす。主体動作動詞(人々が順番に座っていく)、主体動作客体変化動詞(片端から次々と首を切っていく)、いずれも見られるが、「多回的」か否かは動詞の語彙的な意味によってきまるものではない。副詞(「次々と」に「片端から」「順番に」「1つ1つ」)、複文関係(「～するたびに」を前に伴う)など、その文全体によって決まる。

#### ⑤ 人から人への働きかけの移動

「客が文句を言うてくる」など、「対人的な動作における、人から人への働きかけの移動」を表わす補助動詞「くる」について、主動詞は、文法的な性質の点では、働きかけを受けの人が二格名詞で表わされる動詞で、意味的な性質の点では、「言語的な交渉」を表わす動詞が典型である。

補助動詞の意味記述をまとめると、以下のようになる。

主動詞(句)によって表わされる出来事	補助動詞「いく」の意味	補助動詞「くる」の意味	意味派生の枠組み
主体の空間移動 ※移動動詞	・方向性の付与 ・話し手との直示的な関係の付与 ・(進展性)★		「いく」「くる」 共通(空間)
(時間的推移) ※移動動詞が多い	時間的推移： 時間がすすむこと	時間的推移： その時が話し手の 現在になること、近 づくこと	「いく」「くる」 共通(空間から時間へ の派生)
(主体の動作・状態) ※制限緩やか	非テンス的な時間的基準点の付与		
主体の出現	[該当なし]	・出現の強調 ・(進展性)★	「いく」は「事態の推移」、 「くる」は「事態の発生・出現」とい うそれぞれ独自の枠 組みがある
主体に起こる変化 (「くる」のみ、 人の一時的状態も)	進展性	・状態の発生 +進展性 あるいは ・発生の強調のみ	
客体に起こる変化	進展性	[該当なし]	

(多回的な動作・変化) ※動詞によって決まるも のではない	多回動作による 数量の累加	[該当なし]	
対人的な動作 ※相手の二格をとる 言語的な交渉の動詞が 典型	[該当なし]	人から人への働き かけの移動、つま り、話し手などに、 人の働きかけが及 ぶこと	原理的には「いく」「く る」どちらもありうる 枠組み(空間から人間 間への派生)しかし、 実際は「くる」のみ

★：「(進展性)」は、意味として焼き付けられていない

### <全体のまとめ>

本動詞と補助動詞とに共通の意味派生の大きな原理として、「空間」のほかに、「空間から時間へ派生」(時間的推移)、「空間から人間間への派生」(人の働きかけ)がある。本動詞の場合は、この3者につくものではないが、本動詞にも、この3者の派生は存在する。本動詞「いく」「くる」と補助動詞「いく」「くる」との、この共通点は、言語における「直示」が「空間」「時間」「人間」で構成されることを考えると、非常に重要である。また、空間的なことがらを表わす語の意味派生の1つのパターンとして、語の多義の在り方を考える上でも、重要な示唆を与えるものである。

それ以外に、空間移動からの直接的な換喩である人の組織間の移動、つまり社会的な変化を表わす「いく」「くる」、人における心理的・生理的状态の発生を表わす「くる」も、本動詞・補助動詞、共通に見られる。また、本動詞「いく」の「変化」の派生義と、補助動詞「いく」の「変化の進展性」も、つながりが考えられる。

また、本動詞・補助動詞双方を、統一的に説明するような意味派生の方向について、「いく」は「事態の推移」、「くる」は「事態の発生・出現」と結論づけられる。

本研究では、題目の通り、意味を記述することを主な目的としているが、語彙と文法の相関を考察すべく、「文法化」の考え方を使い、本研究で補助動詞とした「いく」「くる」について、意味的、形態的観点から「文法化」の度合いを考察した。そのうえで、日本語の文法体系における補助動詞「いく」「くる」の位置づけについて考察した。

また、動詞「いく」「くる」自体の意味記述ではないが、新しい語が形成される過程としての「語彙化」に関わる言語現象について分析・考察した。具体的には、「もっていく／くる」「ついていく／くる」「やってくる」をとりあげた。

以上のように、本研究は単に、日本語の言語事実の一部を明らかにするという点にとどまらず、語における意味派生、多義の在り方、言語の「語彙」と「文法」との相関、および、「語彙」における新しい語の形成過程についても論じた。この点で、言語の「語彙」と「文法」の本質に、一側面であれ、迫ることができた。